

【書 評】

朝日新聞取材チーム著『野生生物は「やさしさ」だけで守れるか？ ——命と向きあう現場から』（岩波ジュニア新書）

南 有哲

1. はじめに

2024年9月、環境省は奄美大島における「マングース完全駆除」を宣言した。旧 Twitter（いわゆる「X」）などでは外来生物対策に関心を寄せる多くの人々から「歴史的壮挙」という評価の声が寄せられる一方で、「人間の愚挙の後始末を壮挙と呼ぶのは論外」といった反発の声もあり、更にこれに対して「現場の労苦を知らぬもの」といった反批判が寄せられるなど、この種の問題をめぐる人々の考え方の違いもまた鮮明となった。確かに外来生物の駆除や、いわゆる「害獣」対策、野生動物への餌付けといった問題をめぐっては、しばしば議論が紛糾し、感情的さらには攻撃的な言説が飛び交うことも珍しくはない。本書は、この複雑あるいは面倒な問題を正面からとりあげ、現場で対応する人々に丁寧な取材を行い、実情のみならず人々の困惑や葛藤にも踏み込み、かつ『岩波ジュニア新書』にふさわしく、高度な内容を分かりやすく伝えようとするものであり、生物がかかわる環境問題を学ぶ上で必読の書であると考えられることから、紹介と論評、および本書によってインスパイアされたテーマについて若干の考察を試みるものである。

2. 本書の概要と論評

まず「はじめに」においては、東京の河川敷に出現した一頭のシカが、関係者の努力を経てとある動物園にて保護飼育されるに至った過程を述べつつ、その一方で数十万頭のシカが駆除されているという現実を対比し、それにたいして「なんだかとてもモヤモヤする」との感情が吐露される。そして「生きものを前にして『かわいい』と感じたり、命が尽きようとしている様子を『かわいそう』という感情を抱いたりすることは自然なこと」としつつも、「生きものを守っていかうとしたり、うまく共存を図ったりしていくためには、目の前の生きものへの思いだけではなく、それ以外にも、いろいろと考えなければならないことがある」「しかも考えなければならないことは、現場によってさまざま、まさにケースバイケース」「そうした活動に取り組んでいる人たちでさえ悩んでしまうことがしばしばある、そのくらい難しい問題」だと提示する。そして著者たちの基本的な意図として、「こうすればいい、こう考えるのが正解という単純な答えを出すのではなく、現場の人々の悩みや思い、そして自分なりの考えにたどり着いた、といったことを紹介しつつ、各エピソードに関連する情報を取り上げ、読み手が広い視野で考えられるようにしたつもり」だと述べられる。

このように序章においてすでに、感情的で短絡的な「解決」を求めがちな姿勢が、まずもって批判されるのであるが、これは「ジュニア新書」が想定している読者層に対する良き警鐘になるものと評者は考える。

続く第1章「人気者が広げた波紋」は、「はじめに」で紹介されたシカに、著者が実際に会いに行くところから始まり、保護から飼育にいたるプロセスと関係者の思いが紹介される。そして、かつては保護されていたシカが駆除の対象になった事情の紹介、駆除されたシカをすべて動物園で保護された場合についての試算、そしてシカを引き取った動物園が立地する地域におけるシカの駆除の実情と動物園関係者の心情が紹介される。

そして章の中盤では沖縄の離島におけるウミガメの大量殺傷事案が紹介される。そしてその「犯人」であると名乗り出てきた老漁師についての取材を通じて、そのような挙に出ざるを得ないと彼が考えた事情が紹介され、「漁業者とウミガメの共存」のために必要なこと、さらには善行として称揚される「ウミガメ放流会」なるイベントの問題点にも言及されている。

そして後半部ではクマ被害の増加の問題が取り上げられ、その背景にあると考えられる事態や「クマとの共存」のために必要なこと、一部の人々の感情的な言動が「むしろ共存の妨害となりうる」と懸念される理由、さらにはアフリカゾウをめぐる同様の事態が紹介に加えて、象牙問題についての著者の出前授業の経験も語られ、「意見を出すことも大事だが、意見をくみ取ることも大事」という基本的な見地が強調される。この「他者の意見に耳を傾け、自分も考え抜く」というスタンスはまさに「熟議」のそれであり、どのようなテーマについても当てはまるものではあるのだが、「動物をどう扱うか」というような人間の感情に強烈な刺激を与えかねないテーマについては、特に重要になることは明らかである。

第2章のタイトルは、「専門家だって悩んでる—『かわいそう』の線引き」であるが、その中心的な内容は「外来生物駆除活動と環境教育」である。ここでは多様な活動に従事している人々の多様な考え方、問題意識が紹介されているが、なかでも考えさせられるのが Twitter で話題となった「本心としては、外来生物の駆除活動に子どもを参加させたくない」という川井希美氏の発言である。川井氏は「外来種だからという理由で命を軽視するような子どもたちの言動にショックを受け、『殺していい命なんてないんだよ』と発言した」ということである。実は評者自身も、ある植物の専門家より「小学生を外来植物の駆除活動に参加させたところ『よそ者をやっつけろ!』と言いながら引っっこ抜いていて、非常にマズいのではないかと思います。どう考えたらいいのだろうか」という相談を受けたことがあったので、その発言者の問題意識のリアリティはよく理解できる。

川井氏の困惑や苦悩、その結果到達した考え方については本書を読んでいただくとして、「駆除の現場で子どもが単純な人手になっているような場合もある。駆除するなら外来種について背景を説明するような学習や、どうして防除するのか理由の説明が必要で、簡単に駆除すればいいという問題ではないと思う」というこの方の指摘については、いろいろと考えさせられるものがある。実は評者自身が相談を受けた際に、背景学習や説明について同様の発言をしたの

であるが、先述の植物専門家に「それは当然行っているのであって、それでもそのような言動がなされるので困惑しているのだ」と返され、絶句してしまったのを評者は鮮明に覚えているのであるが、現時点であれば、この種の問いに対して評者は以下のように答えるであろう。

第一に、絶滅回避や資源の保全、精神衛生へのダメージや自身の身の危険、さらには法規制への接触といった理由がない限り、子どもたちがヒト以外の生物種の生命を奪うことを特段に問題視する必要は無いものとする。なぜならば後述するように生物世界そのものが「生物が他者の生物の命を奪う」プロセスをその存立の根幹としていること、先史時代の狩猟採集活動から、古代より現代にいたる農林水産業、そして現代の工業やサービス業に至るまで人間の生を支える営みが、何等かの形で他の生物種の命を奪う活動を伴わざるをえない現実があること、そして、そもそも釣りや昆虫採集、山菜取りといった活動に子どもが伴われる、あるいは子どもたちが自ら楽しみとして参加することは、普通に許容されてきたことであって、外来種駆除の場だからといってことさら問題視する必要はないように思われる。

第二に、その一方で「外来」「よそのもの」であることが生物駆除の理由になっている場合は、それを「人間」に適用するような言説や行動は絶対に許されないということ、特に子どもに対しては、口を酸っぱくして強調しなければならないということである。ネット上の言説においても散見されるように、外来生物問題と排外主義的思考がリンクする危険性は無視しえないのであり、そしてそのようなリンケージは生物多様性の保全にとっても、人間社会における多様性の理解についても、不毛かつ不幸な結果をもたらすのは明白だからである。したがってこの点については、川井氏の懸念を評者も共有するものである。

そして第三に、これは生物や命の問題から離れてしまうのであるが、学校や社会教育機関の「地域貢献」「地域連携」が強力に促進されていくなかで、必ずしも適切な内実を伴わない「実績作り」のために子どもたちが動員されてしまう可能性を個人的には懸念しているので、その点についても川井氏の指摘は傾聴に値すると考える。

第3章「調べるのも守るのも簡単じゃない」では、まずストラレンジングした鯨類の扱いをめぐる見地の対立——調査の対象として標準化すべきか、「海に帰す」べきか——について触れたのち、クジラの死体を調査することの意義が丁寧に解説される。そして後半部では絶滅が危惧されるゲンゴロウの域外保全としての研究室内養殖における餌として、これまでの野外昆虫から養殖コオロギへの転換が成功したことの意義が説明されたのち、「養殖物ならいいのか」「植物性の餌に転換すべきではないか」との意見もありうること、また養殖ゴキブリを与える側にも心的な苦痛があることにも触れ、いろいろあるにしても、そのやり方がもっとも「持続可能な」ものであることを説いている。

さらに、域外保全やそこで役割を果たすべき施設について十分な意義を認めつつも、メス二頭しか残っていないキタシロサイのように絶滅を阻止することが不可能な種も存在することや、絶滅種を復活させるというアイディアの存在およびそれをめぐる議論を紹介しつつ、「特定の一様だけのことを考えるのではなく、なるべく自然に負荷をかけず、域外保全の先のことまで見

据えた取り組みが大切であり、そうでなければ、関わる人たちにとっても意義が分からなくなってしまう」と結論付けられる。

第4章「生きものたちのつながり」では「一つの命、一つの種を前にした『かわいそう』という気持ちからは、少し引いた視点で保護や駆除などについて考えてみたい」、すなわち個別の生命という視点からシフトし、生命のつながりとしての生態系あるいは生物多様性の観点から考察を加えるとしているが、その最初の実例としては阿蘇や安曇野の野焼きが挙げられる。人間の手によって野焼きが行われた結果として、森林にもどることなく草原が維持され、そのおかげで地域の人々の生活環境が維持され、貴重な生物種も保全されているとする。さらに実際に著者の一人（杉浦記者）が阿蘇の野焼きに参加した経験も叙述されているが、これは野焼きのテクニックや作業の実態、そして活動に従事する人々の悩みなどが具体的に描かれた、大変リアルなあるルポルタージュとなっており、評者にとっては大いに参考になるものであった。

次に取り上げられるのは、「田んぼ」である。水田には多種多様な生物種が生活していると述べたうえで、人工的環境であるはずの水田が何故そのような場になっているかが考察されており、水田がもともと日本に存在した自然の湿地帯とよく似た特徴があること、また一口に「田んぼ」といっても個性があり、また季節の変化もあることから、「田んぼを営むことがこうした多様なまとまり、つまり生物多様性において重要な生態系の多様性を保つことにつながっている」としている。

もうひとつ紹介されているのは、奄美大島・宇検村のハイビスカスのケースである。外来種ではあるものの、これまで村のシンボルとして植樹され大切に管理されていたものが、世界自然遺産への登録をめぐる議論を契機として、「特別保護地域」たる山頂へつながる道路部分のハイビスカスの伐採されるに至ったという経緯をたどるなかで、「伐採の決断から著者が学んだこと」として、

①「外来種との向き合い方と世界自然遺産としてふさわしい範囲の線引き」

②「納得感—地域住民や観光客など関係する人々における—の大切さ」

を挙げている。

そして本章の最後においては、『大事にしたい』とか『かわいそう』という気持ちをもつことは、生きものについての問題に関心を持つ最初の一步」としつつも「多くの人と協力して問題を解決していくには、自分の気持ちは大切にしながらも、『他の人はどう考えているのか』『自分の第一印象とは違う事実はないか』という姿勢も大事であり、ちょっと調べてみればこれまでとは異なる『風景』が見えることも少なくない」と説かれている。

そして最終章たる第5章「命に向き合う責任」においては、本稿冒頭で述べた奄美大島でのマングース駆除現場を取材し、「9割を捕まえてからが本番」という実情や「根絶」判断の難しさ、そして駆除にあたる「バスターズ」の構成員たちの複雑な心情が簡潔かつ丁寧に紹介しているが、本章の白眉ともいえる箇所が、著者の一人（矢田記者）自らが大学生時代に沖縄本島

にて「オオヒキガエル」駆除に参加した思い出についての叙述である。

生きものが好きで生物学を学ぶために入学した大学で、教員に誘われて駆除活動に参加することになった著者は、事前の時点では「がんばって見付けたい」という前のめりな気持ちになるが、いざ活動が始まると（発見→捕獲→殺処分という流れになるので）「見付けてしまったらどうしよう」という「生きもの好き（特にカエルが大好き）」としての本来の心性の起動、さらにはそのような気持ちを抱えての参加に対する「うしろめたさ」、結局発見することができなかったことで、「対策がうまくいっている」ことへの安心感とともに「大好きなカエルを殺さずにする」ことでホッとした気持ちになった」という、葛藤し揺れ動く自身の心象が活写されており、「駆除の必要性を認識している生きもの好き」の人々の共感を、大いに誘うのではないだろうか（残念ながら評者自身は生物に関心があるとは言え、余り感情移入する方ではない——かつて飼育していた柴犬やシャム猫を除く——ため、理解はできても強く共感するには至っていないであるが…）。

3. 若干の考察

最後に本書の内容にかかわる論点を自分自身の問題意識に、おそらくはやや強引に寄せる形で述べてみたい。そもそも生物世界は決して「やさしさ」に満ちたところではなく、むしろ真逆のそれだと思われる。「捕食－被捕食」の食物連鎖のみならず、生活空間確保や繁殖をめぐる闘争、寄生や托卵そしてアレロパシーなど、近代人の倫理を機械的に適用するならば許容しがたいような事象で満ち溢れており——もちろん「相利共生」のような関係性の存在を無視するわけではないが——まさに伝奇SFの大家たる半村良が半世紀前に『妖星伝』において喝破したように、「生命あふれる地球は、実は生物が喰らいあう醜い星」であるという側面が、間違いなく存在するのであって、そしてその「醜い星」の一角にわれわれ人類が出現したわけである（ちなみにこのことに思い至ったのは、かつて旧 Twitter にてよく語り合った友人が、「エディアカラの静謐な園」への憧憬を述べたことがきっかけであった）。

生命発生から人類出現に至る生物進化の過程の何処かで、「やさしさ」の原基というべきものが発生した——「やさしさ」が、神的存在から人類に与えられたものではなく、進化のプロセスのなかで発生したと考えるならば、そのように想定されるのは当然であり、したがってまた人類以外の生物種もその種なりの「やさしさ」を保持していても何らおかしくはないわけであるが——人類のそれはおそらく、内集団の構成員間における観念的規範および相互行為として出現したのであろう。そしていつしか人類は、その「やさしさ」を、何等かの絆を形成することになった他の生物種へも向けるようになったと考えられる。

他の生物種に対する「やさしさ」がそのようなものとして始まったのだとするならば、その絆の在り方によって、その生物種に対する「やさしさ」に差異が生じたとしても——「やさしさ」が向けられること自体の有無も含めて——公平性を欠くものになりうることは想像に難くない。

実は本書 74-75 頁において、「イタリアの研究チーム」の研究報告として

①メッセージアプリなどで使う「絵文字」において分類できた 112 種類の生きもののうち、92% が動物で占められており、なかでも脊索動物が 70 種であるのに対し、節足動物は 15 種、植物は 16 種、菌類は 1 種であった。

②人は脊索動物など身近な生物に対してより共感的で意識的になる傾向があり、生物保護活動をする際においても、植物や菌類が自然界で大きな役割を果たしているにもかかわらず、動物に関心やお金が集まりやすい。

という結果が紹介され、「実際の自然の姿に対して、私たちの認識に偏りがあるということは頭の隅っこに置いておくといいかもしれません。」とあるが、これは大変重要な指摘であると考えられる。なぜならば著者たちは、先述した「公平性の欠如」そのものではなく、「欠如しているという認識の欠如」に読者の注意を促しているからである。われわれが（ヒト以外の生物種に対する）「命の大切さ」「命は平等」を口にしようとするとき、これは常に反芻されるべきことであり、これまた旧 Twitter 上での知己がしばしば指弾するところの「生物観におけるルッキズム」にも通じる事柄であると言えよう。

4. おわりに

とまあ、いろいろと駄弁を弄してしまったわけであるが、外来生物にせよ、都市にまで進出する野生動物にせよ、気候変動などによってその自然分布域を変動させつつある生物たちにせよ、「人新世？」を生き抜いていかねばならない我々にとって、生態系や生物多様性といったマクロな次元のみならず、個別の生きものに対してどのように接するべきなのか、そしてその生命をいかに扱うべきなのか、社会全体あるいは個々人として、判断を迫られることが増えるのは確実であろうから、特に若い人々に向けてこのような良書が出版されたことの意義は非常に大きいのではないかと評者は考えるものである。